

ガイドが綴る北海道
—永楽の黄色いハンカチ—



織春久遠

ガイドが綴る北海道

ー永楽の黄色いハンカチー

その添乗員さんはじっと黙って座っていた。

けっしてしゃべらず、ときおりお客様から声を掛けられると、にっ、と笑い、必要最小限の言葉を発して、また、一人で自分の世界に沈み込んでしまう。

いや、いい人なんです。

行程の管理、確認、ガイドやドライバーに対する指示もきっちりしているし、お客様に対する言葉も親切で的確だし、何よりガイドを軽んじる言動がない！

ガイドを立てて、卒なく行程を進めている。

しかし、しかしだ、バスが出発して、ガイドの話が始まると、なぜかこの添乗員さん、私の話を聞いてはくれない。

深一く、静かに、日本海溝の底に沈んでいく海底探査船のように沈黙の世界に浸りこんでいく。顔からは表情が消え、私の言葉だけでなく、周囲の一切の情報が遮断されたのごとく固まってしまう。

目は開いている。

だが、その瞳には何も映ってはいない。

呼吸はしているかどうかはつきりしない。

青銅で出来たオブジェのように、一番前の補助席に置かれていた。

周囲が「はい、皆様、右手をご覧くださいませー」という私の声に、ざっとバスの中のほとんどが右方向を向くとき、一人だけ前方を凝視しているでもなく見ている人が一番前にいる。この状況ははなはだ難解な状況ではあった。

「ここで添乗員さんに登場していただこうと思います。」と水を向けると、「え、自分には、わかりません」と普通に応える。

死んでいるわけでもない。まして、答えを聞く限り、ちゃんと聞いている。

わからん。 私にはわからんぞ。 なぜ皆と違う反応なんだ。

第一私が話し始めると、添乗員さんの周囲の空気だけが他の空気と混ざるのを拒否している。どよ〜んと添乗員さんの周りにへばりついた空気はそこだけ動かずに沈殿している。

私は意地になって声を張り上げる。何とかして振り向かせようとする。

何とか他のお客様と同じ反応をしてもらおうと、いつもより余計にのってしまった。

おかげでお客様はのりのり、普段よりもお客様の歓声が多い。途中のドライブインで運転士のNさんから「今日は随分と飛ばしてるなあ、お客さんすごい喜んでるだろ？息切れしないようにやれよ。」といわれた。

しかし、添乗員さんは相変わらず、私の高校の美術室の奥に鎮座していたデッサン用の石膏像の

ように、身じろぎもしなかった。

なんやねん！

すご、おもしろくない。

私の話がつまらないのか、惹きつける話術が未熟なのか、文句あんならゆうてみい！なんか私に文句あんのなら、私かてだまってはおらん。

こうなりや、対決や！

旭川の手前のドライブインで休憩を取ったとき、私は添乗員さんを捕まえて、こう言い放った。

「あの、添乗員さん、お疲れなんでしょう？」

「あ、いえ、自分は大丈夫です。」

「なんか、気もそぞろで、私の話全然聞いてはいただけないみたいで。」

「あ、そんなことはありません。いろいろ、確認とか次の段取りとか考えていたものですから。」

「あの、私の話、つままないですか？」

「いえ、大変楽しい話で、お客さん皆さん喜んでおります。さっき顔見知りのお客さんも、『今日のガイドさんすごーあたりだね！』と誉めておられました。」

「そうですか。有り難うございます。」

なんか拍子抜けしてしまった。

初夏の山あいの木々の緑は綺麗で、空は抜けるように青かった。層雲峡の溪谷の案内をしているなかでもお客様の歓声がバスの中に満ち、旅はいよいよ佳境にと入っていく。

にもかかわらず、添乗員さんはどういうわけか別な世界に浸りこんでいた。

年のころは27、8歳くらいでしょうか、頭はスポーツ刈りで、ちょっと渋めのいい男系、180くらいもあるのかしら体はがっしりとしていて胸板なんか厚そうで、シュワちゃん系〜♪

それでいて最近には珍しくまじめそーな人、そんな感じの人がボーっと違う世界に入っているのはなんとも気になる。しかし、お客様は気付かない！

理由はすぐわかった。お客様と添乗員さんは同じ方向を向いているのだ。

私だけが皆と向き合っている。どんなに巧妙にカンニングをしても先生は意外と分かってしまうというが、自分に視線を向けているか関心がほかに向けられているかはすぐに分かるものだ。

バスは大変な盛り上がりを見せている30数名のお客様と、一心不乱に運転するドライバー、自分を見て欲しい自己中で目立ちたがりやのガイド、すぐに異次元に心を飛ばす添乗員が、和気藹々のなかにもばらばらな気持ちを持ちながら、最初の宿層雲峡に到着した。

今日はいつもの民宿ではなくお客様と同じ宿だという。

ラッキー！

溪谷の宿は静かで落ち着いて、都会の喧騒も忘れるほどの素敵な宿だ。私はこの温泉が大好きだ。

それにこのホテルは溪谷が見下ろせる露天風呂があって、初夏の日の沈んだ層雲峡の山あいが周囲の明かりにうっすらと浮かび上がる景色は、かすかに聞こえる虫たちの奏でる夏のBGMのなかで心と身体の疲れを癒してくれる。

お客さんたちの食事も終わった頃かなと思いながら、浴衣の上にどてらを羽織って、ロビーの売

店にアイスクリームを買いに行った。

お、添乗員さんがいた。

ロビーの片隅で電話をしている。どうして自分の部屋から掛けないのかしら、と思っていると、別段盗み聞きしているわけではないのだが、空中を伝わる音声が私の耳に飛び込んできた。仕方がないから聞いてやることにした。

「あ、はい、それはわかっております。自分もそれではいけないとおもっています。はい。・・・信じていただくしか・・・いえ・・・お時間をいただけませんか。・・・はいおっしやるとおりです。・・・はい。」

なにがなにやらさっぱりわからん。

だが、苦戦しているのはわかった。ひょっとして、このツアー明日の宿がないなんてなことないだろうな？去年のツアーであったぞ確か！出発してすぐに、3日目だか4日目に実はまだ宿が取れてないんで、行程はどう変わるか分かりませんから、とかいって添乗員さんが途中で電話かけまくりどなりまくりで、最後は予定された温泉地からお隣の温泉地まで走るはめになった。それでもお客様はいい人ばかりで、添乗員さんとともに楽しいたびをさせてもらった。

そうか、そうに違いない。それであんなに添乗員さん心ここにあらずなんだ。

渓谷のお宿は夜の帳に包まれて、静かに静かに更けてゆきました。

一夜明けると、昨日の天候に更に輪をかけたような晴天で、空はどこまでも蒼く、周囲の渓谷も木々の緑が深く美しい色合いを際立たせています。流星の滝、銀河の滝、白糸の滝、大函、やがてバスは石北峠を抜けて網走に向かいひた走っております。

添乗員さんには何の変化も見られません。昨日と同じに、ちょいと目を離すと、忘却のかなたへと旅立ってしまわれます。

私は昨日以上に腕によりをかけてお客様を盛り上げます。事情がわかった以上、万一のときでも楽しいたびをしていただければ、お客様は満足していただけます。宿が変わろうが、温泉地が変わろうが、ようは楽しいたびをするために来ているんだから、楽しませてあげれば添乗員さんだって顔が立つというものよ。

「昨日も言ったけど、そんなにハッチャキこいて最後になったらこわいからだめーとかいって、俺にごんぼほったりすんなよ。」（これべたべたの北海道弁です、よく意味がわからない人は北海道弁のページを見てください。）

昼食の時、ドライバーさんが私に言いました。

「何言ってるのよ、実はね・・・。」

私は昨夜の電話の一件と、私の想像した通りの話をNさんに教えました。

「ホンとかよ！やっぱいなあ。そういう時って、俺たち悪くなくても俺たちも連帯して悪いみたいに言われるんだぜ。」

「Nさんを悪いことにしてすむのなら私はすぐそうするね。」

「おい！」

「でもお客さんには楽しんでもらわなきゃいけないでしょ。そのことでつまらない思いをして、旅行自体がつまらなくなつて、北海道がつまらないと思われたら、これはまずいでしょ。」

「君は北海道観光協会の誉れだな。」

「では、そういう方向で」

「なんだよ、そう言う方向って？」

「あらん限りのちから振り絞ってお客様を楽しませるの。」

「ばかこけ、俺なんざいつも全力疾走だぞ。」

「そして最後はいきぎれでしょ。」

「・・・ときどきな。」

「添乗員さんのためにがんばるのよ。」

「今回、随分添乗員さんに肩入れしてるじゃねえか。」

ちよいと痛いところを突かれた。

「君い、仕事に私情を持ち込んじゃいけんよ。わかつとるかね。」

「なにさ、Nさんに言われなくても分かってるわよ。それより協力するの、どうなの、その態度次第で今後の付き合い方変わるからね。」

「俺はよ、仕事の時は全力疾走よ、出来ることは何でもいいねえ、お任せのNさんって言うくらいだぜ。」

「頼りにしてるわよ。」

思えばちよいといけめんの添乗員が異界の門を越えて幽体離脱した状態に、どうにも気になって仕方ないというだけだったのだが、まあそこは成り行きで、ひよっとしたらひよっとして恋の花咲くことだってある。

車は網走に向かって走っていた。今日のお宿はウトロのお宿、宿の部屋割りを添乗員さん作っていたから今日の宿は間違いなく取れている。危ないとするとな次の阿寒湖か、あそこは宿の絶対数が少ないからよくこういったことが起こると聞く。

よっしゃあ、今日一日お客様が泣いて喜ぶようにとことんがんばっちゃおう。

端野の町を抜けるととき馬喰一代（ばくろういちだい）のお話しでは、お客様の手に手にハンカチが揺れ、しとどの涙を吸っていた。網走の監獄では当時の逸話に皆が驚嘆の声をあげ、天都山からとおくオホーツクを眺めると大自然に対する歓声が湧き、色とりどりの花が咲き乱れる原生花園ではしばしその可憐の美しさに全員がたたずんで動かなかった。

よし、絶好調！

原生花園を出てからは、クマが鹿を襲う写真をとって新聞社に60万円で売った旅行者の話や、羅臼の冷蔵庫をあさるため毎晩通ってきたクマ騒動、鮭の定置網に泳いでいって網に引っかかって溺れたあほなクマさんの話で、爆笑の渦、バスの中は最高潮の盛り上がりを見せていた。

約1名を除いては・・・（まだ、宿とれてへんのやろな）意外に私は冷静に添乗員さんを観察していた。

勝負は明日だ、と私は踏んだ。

翌朝はウトロの知床半島を巡る遊覧船に乗り、屈斜路湖に向かった。

屈斜路湖の湖畔の砂湯を終え硫黄山に到着、そろそろ阿寒湖の宿の部屋割りを準備する頃だ。運転士のNさんも気にしていて、途中の休憩時間にもそれとなく聞いてきた。

硫黄の匂いのぷんぷんする休憩所で温泉玉子をほうばりながら、まだ部屋割りカードを出してないところを見ると、解決してないのだろうかと話合った。こちらから聞く話ではなかったの、とりあえず我々は出来る全力を尽くそうということになった。

摩周湖の展望台は意外にも霧が出ていた。この時期、温度が上がりすぎると霧が発生し易く、一番観光客が多い時期がきりに包まれる可能性が多い時期でもあった。

しかし、霧が湖面をすっぽりと覆い尽くし、その真中から中ノ島がひょこつと顔を出している状況は、思わず声を失う位の美しさだった。

周囲の山々は深い緑と淡い緑に飾られ、湖面を覆う霧は薄い青の静寂を語り、真中にある中ノ島は暗い藍色に塗られていた。

これほどの霧なのに空ははれ、山々の緑に対照的な蒼穹の広がりを見せていた。

その幻想的で神秘的な自然の描き出した一枚の絵画のような深い美しさに、お客様全員がしばしその場を離れようとせず、ただただ呆然と移ろい易い自然の作り出した瞬間の芸術に魅入られていた。

霧が雌阿寒の山々の断崖からひとかたまり、湖に落ちるように流れ込んできた。ながれこんだ霧のひとかたまりが湖の表面の霧にぶつかり、まるで争うかのように渦巻き、波立つように波紋を広げ、やがてもとからいた霧達と仲良く肩を組むように紛れ込み、湖に静寂が戻り、一時見えなくなった中ノ島が姿をあらわした。

突然初老の男性のお客様が拍手した。静寂を破ってこだまする拍手は自然が見せてくれたドラマチックな演出に対するものだったが、回りのお客様が皆つられるように拍手をした。

アンコールは効かないが、素敵なものを見せてもらった、正直な反応だった。

バスに戻ったお客様が口々に「素晴らしかった！」「素敵だわあ。」と最大級の賛辞を送っていた。

私はマイクを取り上げていった。

「神秘の湖、摩周湖は、晴れた日でも時として霧にその湖面を隠すことがございます。本日は、皆様をお迎えして、摩周湖もちよつと恥ずかしがって霧に隠れていたようでございますが、あれは、またどうか北海道を訪れて下さいという、摩周湖からのメッセージだそうでございます。どうか、また摩周湖を訪れて、次には霧から姿をあらわした摩周湖をご覧頂きたいと思います。」

突如、バスの中に拍手が鳴り渡った。

「ガイドさん、またくるわ、必ずくるわ。」

口々にそう言って下さった。この瞬間がガイドをしているのなんともいえない瞬間だ。

やがてバスは北海道らしい広々として遠大な景観のなかを走り出した。添乗員さんがマイクを借りて本日の部屋割りを発表した。

良かった。お宿は他のところに変更にはならなかったようだ。この後は札幌で、札幌で変更になることは余り聞いたことがない。今回の仕事も無事に終わりそうだ。阿寒湖でお客様が遊覧船に乗っている間、暫く休憩となった。

添乗員さんも遊覧船に乗らずに休憩するようだ。遊覧船のすぐ側のホテルでコーヒーでもどうか

と誘われた。

「ええ、ご一緒します。」

Nさんは「俺も・・・」といいかけたが、「ドライバーはお客様の荷物があるためバスから離れないそうです！」と変わりに言ってあげた。

Nさんは「え、あ、はい？いやそうなんですよ。」といい、なにか寂しそうにバスに残った。

湖畔のホテル山浦のコーヒーショップでコーヒーを飲みながら、つい言ってしまった。

「あの、なにか悩んでいることあるんですか？」

もし、明日の札幌のホテルがない！なんていわれたら、息切れしてる場合じゃなくて、再度ガイドのど根性みせねば、と思った。

「え、いや、なにか。そう思いましたか？」

逆に聞き返されてしまった。

「ここまでのバスの中でずっと何か遠くを見てみたいでしたから。何か困っていることで、私や運転士に出来ることなら何でもしますよ。」

「そんな遠くを見てましたか。自分では気が付かないんですが。」

「何か苦悩する高倉健みたいでしたもの。」

実は私高倉健のファンなんです。あの渋めの声、ボツボツと唐突にしゃべるせりふ。それでいて重みがあって。キムタクもいいがこっちも捨てがたい。

「そうでしたか。いや、自分の私的なことですので。もしガイドさんのご迷惑になっていましたら。申し訳ありません。」

深々と頭を下げられた。

「男の方が頭を下げないで下さい。私に出来ることがあればと思っただけで、迷惑なんてとんでもないです。」

ん、どうもホテルのオーバースタッフじゃなさそうだなあ。

「いえ、確かに自分はどうかしておりました。もし、途中で同じような状態になりましたらカツ入れて下さい。まだ、自分は若輩ですが、今回ほど素晴らしいガイドさんとドライバーさんに当たったのは初めてです。お二人の仕事の妨げになることは自分の未熟さとともにお客様に迷惑がかかります。」

ここまでの3日間いろいろな話をしてきたし、結構気心も知り合えた気がする。

何か切羽詰った感じが常にあるのだが、打ち解けてこうやって話をするときは、礼儀正しいということだけで後は何も変わったところはなかった。ホテルのトラブルじゃなかったら、なんなんだろう？

素直に聞いてみた。

添乗員さんは暫くじっと黙っていた。

気が付くと、横にバスに残っているはずの運転士のNさんが来ていた。

「あんた、なんか悩んでいるんなら言ってみないかい。このガイド、すごく心配しているんだ。ひとごととは思えないんだよな。」

まったく邪魔者が・・・と、添乗員さんが口を開いた。

「ここまでお世話になったお二人に、このまま黙っているのは失礼と思いますので、自分のつまらない話ですが聞いていただけますか。」

Nさんはずうずうしく私の横に座り込んで追加で頼んだコーヒーに口をつけた。

「自分は六年前まで真駒内の陸自におりました。退隊するにはまだ間があったのですが、隊内での人間関係やもろもろの事で嫌気が差して、自分から退隊しました。暫くはススキノでアルバイトというかフリーターのような生活をしておりました。

親は福井におりましたが、早くになくなりまして、天涯孤独の身の上ですので、気楽だったせいもあったと思います。

親類はおりましたが福井県の奥で農家を営んでおりまして、ほとんど行き来がありませんでした。

縁ありまして、六年前の秋、自分が働いておりました居酒屋に来ていた娘さんと知り合いになりました。自分は高校しか出ておりませんし、女子の学生さんなどは眩しい存在だったのですが、彼女は屈託なくお付き合いさせていただきました。

知り合いまして幾月もしないうちに、将来のことを考えるようになりました。

自分は中途半端な学生生活を送り、学校を出た後自衛隊に入隊しましたが、そこも勤まらずに退隊し、当時の仕事も一生続けられるような仕事ではありませんでした。

彼女は、自分に本当にやる気があるなら今からでも大学を出なさいとすすめてくれました。彼女は既に4年生で東京に就職も決まっていました。

地元ではなく東京で仕事がしてみたい、そう言って決まった就職だそうです。

自分は実現などは出来るかどうか分かりませんでしたが、彼女と離れたくない一心で、勧められるままに東京の大学を受けることにしました。

その年は駄目でした。しかし彼女はあきらめないで続けるよう自分に迫りました。

普通の人が三年間の高校生活で学ぶものを3ヶ月では不可能だ。だが、1年あれば可能性は非常に強い。長い長い人生のなかで2年や3年の道草はどうって事ではないし、これからだってあるだろう。大切なのはその道草も含めてどう生きていくかだ、そう教えてくれました。

自分は今まで中途半端で先のことなど考えたことのない生活をしておりました。そんな自分が真剣に何かをやることを教えてくれたのが彼女でした。

彼女は昼は勤め先の研究所で仕事をして、疲れていたにもかかわらず帰ってくると自分の先生をしてくれました。

この時の彼女の負担は大変なものだったと思います。けれど思い出してみるとこの時期が一番幸せでした。自分は何も考えずに彼女についていきました。

あの時の生活は、一日が勉強している時間と、それ以外の時間の2種類しかありませんでした。

朝6時に起きて、彼女を7時に送り出すと、すぐ側の図書館で9時から食事もとらずに17時まで勉強でした。図書館が閉館すると、夕食の材料を買って帰り、彼女の帰るまで部屋でまた勉強でした。

勉強している時間は最初苦痛でしたが、やがて、勉強していないと不安を感じるほどになりま

した。

一日のなかで勉強している時間は平均で13時間でした。

時にはくじけそうになる自分を支え、励まし、立ち上がらせて、強引走らせたのは彼女ですが、その彼女についていこうと決めたのは自分でした。

一年が過ぎ、自分は大学に合格しました。しかし、その時自分は、はたと気が付きました。経済的なものは100%彼女に頼っていました。そんな自分には入学金も授業料も払えませんでした。

彼女は笑って出してくれました。それはほとんど彼女の全財産でした。

あとで彼女のご両親に言われたのは、親や従兄弟からまでお金を借りていたそうです。

自分は、有頂天でした。アルバイトで収入が少しは入るようになると、酒を飲むこともありました。

他の人より三つ年上だろうと思ったら、学内には同じ年のものがごろごろしていました。2年や3年浪人して入ってくるのは普通だとも教えられました。こんな数え歌がありました。

現役偶然、一浪当然、二浪平然、三浪毅然、四浪憊然、五浪啞然、六浪愕然、七浪呆然、八浪悄然、九浪慄然、十浪超然。

この頃から彼女とのいさかいが始まりました。

自分は自分を支えてくれたものに気が付かなくなっていたんです。

今思えば、浮かれていたんです。

周りが見えないままそんな生活が3年以上続きました。彼女は自分の学生生活の経済的な面倒を見て、尚且つ自分の生活を続けて・・・今考えるとぼろぼろに磨り減っていたんです。

四回生の秋、最後の授業料を払い終えた日でした。

自分はコンパで遅くなって帰ると、部屋には彼女がいず、見知らぬ男の人がいました。

誰なのか問いただすと、男性は彼女の父だと名乗りました。

自分は突然のことにびっくりして、しどろもどろになりました。

どういうことかも分かりませんでした。

その時言われたのは、彼女を連れて帰る、もう二度と君と会うこともないだろうし、合わせる気もない、といわれました。ここに残っていたのは、娘をこれほどまでに虐げた男の顔をこの目で見るためと、この手紙を渡してくれと頼まれたからだといいました。

手紙を受け取った瞬間、したたかに殴られました。

気が付いたときには誰もいなくなっていました。しんとしてひっそりした部屋が妙に落ち着かないのを今でも鮮明に覚えています。

彼女からの手紙にはこうありました。

(卒業まで一緒にいられなくてごめんなさい
さい)

幸せになってくだ

自分は、自分に宛てた手紙には、恨み言が書いてあると思っていました。

彼女の父親が現れた時、一瞬でも考えたことは、責任をとれといわれるということでした。

どういおう、どのような返答をしようと考えました。

そんな自分が恥ずかしくなりました。

彼女がいなくなった時から、自分の中に何かが足りなくなりました。

本当に大事なものは失って始めて分かる。これは真実でした。

アパートの部屋代はきっちり卒業する3月まで支払済みで、食費だけアルバイトすれば良い状態でしたが、お金の問題ではなく、明らかに足りないものがある状態でした。

一月後、自分は彼女の親ごさんの家を訪ねました。

自分なりに考えた上でした。しかし、彼女に会わせてはもらえませんでした。

仕事を止めて実家に帰ったはずの彼女は、いきなり消え去った状態でした。

父親から門前払いを食った自分は、彼女に会いさえすれば何とかかなると思い、その家を一週間張り込みました。けれど彼女は現れませんでした。

東京に戻った自分は手紙を書きました。

それに対しての返事はありませんでした。

また、再び彼女に会いに行きました。両親ならば居所を知っているはずだと確信していました。

自分の顔を見た彼女の父親は、これ以上付きまとうならば警察を呼ぶといいました。

自分は警察に突き出されてもいい、一目彼女にあって自分をわびたいといいました。

君はどうしたいんだと聞かれました。

自分は、彼女ともう一度やり直したい、彼女を幸せにしたい、彼女のために生きたい、と告げました。

娘は君のおかげで辛い悲しい思いをしてきた、これ以上悲しい思いをさせるわけにはいかん、といわれました。

自分を信じて欲しい、それしかいえませんでした。

傍目から見ると娘を食い物にしたとしか見えないといわれました。

今までは彼女に負担をかけてきた。これから自分が彼女を幸せにする番だということ、就職は決まったのかと聞かれました。

まだ自分は就職が決まっていなかったために返事が出来ないでいると、結局そうやって娘に取り付いてひものような生活をするつもりなのだろうと言われました。

必ずきちんと就職をして、どんなことが合っても娘さんを幸せにしたいと告げました。

それは勤めが決まってから言う言葉だとののしられました。

せめて、手紙を渡して欲しいと、自分の思いをしたためた手紙を託して、再び東京に帰ってきました。

戻ると、久しく行き来のなかった福井の親類に連絡を取り、就職のお願いをしてまわりました。

自分が大学に通っていたことさえ知らなかった叔父叔母は驚き、あんた苦労したんだねえと声をかけてくれました。

自分は彼女のことを言い出しかねましたが、それはフェアではないと思い直し、福井に行った際に全てを話し、ちゃんと就職をしたい、今からでは遅いかもしれないが、しかし、この恩は一生忘れないと頭を下げました。

叔父は地元の〇〇連の会長をしていました。

ちょっとした名士ということになるので顔も広いだろうと思っていました。

最終試験が締め切られていなかった現在の会社を受けないかとすぐに連絡が来て、自分は必死に受けに行きました。それ以外も含めて20社以上は受けました。

言外にはありますが、両親がいないこと、陸自のことは隠していたため形式上は三浪になること、等でほとんど落とされました。

わずかに残った中に叔父の推薦の現在の会社がありました。試験や面接で会社を訪問してこの会社に勤めたいと思いました。

仕事の中身は何でもいいと思いました。

仕事は男が一生かけてやる以上どんなことだって出来る。そこで、何をするかだ、と思いました。

この考え方も彼女に教えてもらったことでした。

現在の境遇を不幸だと思うのではなく、この状況で何が出来るかを考えるのよ、といったかの女の笑顔が目从前から離れませんでした。

就職が決まったとき、飛び上がりました。正直なところ、大学に合格したときより嬉しかったです。

翌日、自分はまた北海道にきました。四度目に顔を合わせる彼女の両親は、玄関からあげてもらうことが出来ました。

就職が決まったことの報告と、彼女にあって彼女の本心が聞きたいと告げました。

もし、彼女が自分の顔も見たくない、二度と関わりたくないというのであれば、彼女をこれ以上悲しませるつもりはないこと。もう一度チャンスを与えて欲しいと再度告げました。

彼女のおかあさんが、自分の叔父が先日尋ねて来たことを教えてくれました。叔父は、どうしようもないと思っていた甥が、たった一つのこのために命がけで頑張っている、その気概に協力をする気になった。その気概が本物かどうか、話だけでも聞いてやってはくれないだろうか、信じる事が出来ないと見定めたら、表に叩き出しても結構だからといって、玄関先で土下座をしていったそうでした。

自分は涙が出てきました。厳しい叔父でしたが、感謝する言葉が見つかりませんでした。

今は、まだ就職が決まったばかりで本当に就職したわけではない。就職してから再度考えようといってくれました。

それとて、その後彼女がどう考えるかは分からないといったが、少なくともチャンスは生まれました。

彼女に教えてもらった言葉はここにもありました。

負けつづけている間は勝つチャンスはある。あきらめなければ人生には何度でもチャンスがある、と。

難しいのは勝つことではなく、勝ちつづけることだとも言っていた。これからが本当の勝負だと。

4月が過ぎ、入社式が済み、赴任地が決まり、仕事に順調に滑り出しました。

相当トウの立った新人だったのですが、自衛隊時代の訓練がここで役に立ちました。まだ体力は衰えてはいなかったですし、添乗員の仕事はある意味で戦争とおなじでした。

返事はありませんでしたが、毎週毎週彼女の実家に手紙を書き綴って送りました。

仕事の報告がほとんどですが、それ以外に自分を信じてもらうすべがありませんでした。

7月を前にして、北海道に仕事が決まったとき、勝負の手紙を書きました。

行程を送り、その途中で札幌による。もし会いたくないのであれば、そのまま帰ります。もし、チャンスをもたらるのであれば、京王プラザホテルの喫茶店に仕事が終わる20時に来て欲しい、と。

その手紙を投函しながら自問しました。

自分はこれでいいのか、彼女を本当に幸せに出来るのか。

彼女は自分を今どう思っていてくれるのかと。

或いは、もう既に他に付き合っている男性がいるのかもしれないし、自分に完全に愛想を尽かしているかもしれませんでした。

けれど、どこかではっきりさせないと、これ以上つきまともってもご両親にも迷惑になる。自分がいないほうが彼女の幸せになるのであれば、そのほうがいいのかもしいと考えました。

そうして、最後の決断をしてもらう日が明日なんです。」

聞き終わったNさんが言った。

「幸せの黄色いハンカチやん」

「え？」

Nさんは鼻声になっていた。

「知らんならええ、しょうもない。明日が勝負か。」

「はい。」

私は声が出なかった。複雑だった。

これで振られたら、私にはチャンスが巡ってくる。

でも、重すぎる。この人の背負っているものが私の方にも乗ってきたら。

…私はパスすることにした。

純粋にこのラブストーリーの応援をするほうが私らしい。私もちよっと目頭が熱くなって上を向いた。

Nさんと違って私は泣いたらマスカラで涙が黒くなるんだ。

阿寒の朝は静かな朝だった。ホテルにバスをつけ、ホテルのコーヒーショップでNさんとコーヒーをすすっていると、お客さんが降りてきた。

「お早う。」

「お早うございます。」

「今日もよろしくね。」

「こちらこそお願いします。」

朝の挨拶を交わしていると、添乗員さんが現れた。

やつれていた。

寝ていないと見た。

睡眠不足の典型的な顔だった。

一体ここまで思われる女性って、ある意味で最高に幸せだと思った。

ただ、彼女が彼に教えた言葉が今よくわかった。

『幸せになることは難しくはない、難しいのは幸せになることではなく、幸せでありつづけることだ』

これは名言だばくって今度使おうと思った。

バスは十勝の広大な平原を疾走する。遙か彼方に地平線が見え、その広々した大地を満喫させると、日高連峰の山々が石狩平野への関門として立ちふさがった。

日高の山の中に点在するドライブインで昼食を取り、いよいよバスは石狩平野に踏み込んでいく。

睡眠不足の添乗員さんはすでに異界モードに踏み込んでいたし、私は昨日までのバリバリ全開モードから、失恋レストラン風のおとなしやかムードに変更されていた。

だが、お客様もこの4日間の疲れが出たのか、今日は見るものが少ないせいか、かなりお休みモードのかたが多い。余り無理をせずに休んでもらうと、ほとんど峠までには全員が寝てしまった。

日高の峠を下って夕張から札幌までは1時間ちょっと。

「この夕張が、幸せの黄色いハンカチの舞台なんだよな。」

聞くとおとなしに運転士のNさんが言った。 　どうなるんだろう。

二人は、このまま分かれてしまうのだろうか？

それはいけないと思う。

彼を支えひっぱってきた彼女が、こんな分かれたままなんておかしい。

あ、でも、彼と一緒にいることが彼女の幸せだろうか？

そうか、好きで一緒にいたのを両親が引き離した前提で考えていたけれど、彼女自身の意志という可能性だってあるんだ。

結果の倍くらいの過程がある。

彼女が彼が尋ねて来たのを知らない場合。

彼女は彼のために身を引いた場合。

彼女は彼をもう嫌ってしまった場合。

彼女は彼以外の男性ともう付き合っている場合。

これは、いろいろな状況がある。どういう結果になるんだろう。

バスは夕張を越えもう新札幌の近くまで来ていた。

添乗員さんはと見ると、もう完全に下を向いていた。

プレッシャーが肩に思いっきりのしかかっているのが見えて分かった。

運転士さんが言った。

「札幌に入りました。」

彼の肩がぴくんと動いた。　さすがにお客さんも添乗員さんのただならぬ様子に気がついた。

「添乗員さん具合が悪いんじゃない。」

「なにか昨日から風邪気味みたいで熱があるとの事です。」

こうフォローすると、「まあ、大変！」と風邪薬があちこちから集まって、象に飲ませるくらい

になった。さすがに飲ませるわけにはいかないんで、もう飲んだそうですってその場をしのいだ。

バスはホテルに着いて、お客さんを降ろすと、永楽の車庫への路をひた走っていた。

「どうなるのかなあ・・・」

「どうなるんだろうなあ・・・」

「今何時だい？」

「17時30分」

「間に合うかなあ。」

「急げば、なんとか」

それからは超特急だった。軽油の補給、車内チェック、日報、着替えは端も外聞もなく帰りのバスの中でして仕舞った。

「お疲れ様ー」　　といって会社を出たのが18時30分だった。

Nさんの車に乗せてもらってびゅーと駅方向に向かった。

「まだ早いから添ちゃん、ホテルにいるかな？」

「もう行ってるんじゃない。」

「チョツと覗いて見よ。」

お客さんの泊まっているホテルから回ってみると、なんとロビーのコーヒーショップに下向き加減の睡眠不足男がいた。あんなにカッコよかったのに、今はやつれてみる影もない。

ぷぷー！

クラクションを鳴らすとこっちに気が付いて、ロビーから表に出てきた。

「どうしたんですか？」

「私達仕事が終わったから様子見に来たのよ。もうそろそろ行かなきゃ駄目じゃない。」

「駄目です。きっと来ません。駄目です。」

「なに言ってるのよ。」

「だって来てくれるなら、今までだってチャンスが会いましたし、手紙に返事をくれてもいいはずです。」

「なに、情けないこといつてるのよ。」

「いいんです。やっぱり駄目です。」

「どうして？」

「彼女は女性としても、人間としても素晴らしい人です。きっと今は別な人とお付き合いしていると思います。」

「そんなことないって。」

「それでは、どうして今まで連絡をもらえなかったんです？」

「なんか事情があったのかもしれないじゃない。」

「それなら、彼女のお父さんが二度と会わせないとか言うのは変じゃないですか？」

私達は、車をはさんで路上で言い争いをしていた。

運転士のNさんがぼつと言った。

「これは、全く黄色いハンカチだわ。」

「え？」

「添乗員さん、みちっぱたで言い争いもなんだから、まず車に乗りなよ。」

「あ、はい。」

ホテルから出てくる人も私達が口から泡を飛ばして論争しているのをじろじろ見ていたし、客待ちのタクシーの運転手さんも聞くとはなしに、耳をそばだてているのが分かった。さすがに周囲の状況からまずいと思ったのか添乗員さんは素直に車に乗り込んできた。

車は急発進した。

「ど、どこに行くんですか？」

「京王プラザにきまっとるだろが。」

「駄目です。」

「添乗員さんさ、俺はしがないバスの運転士だけども、これに似た話、映画で知ってるんだ。チョッと状況はちがうけどな。その主人公も迷って怖くて行かないって言い出すんだけど、その時言われるせりふがいいんだわ。『もし、いかないで、待ってたらどうするの？』ってさ。これ、彼女が待ってたら添乗員さんどうやって償う？大変なことだぜ。いいよ乗りかかった船だ、俺たち見てきてやるから。それで駄目なら、新しい人生探せばいいんだ。どんなことになったって命まで取られるわけじゃねえ。」

「でた、Nさんお得意のせりふ。」

「まぜっかえすんじゃねえぞ。添乗員さんのほうがチョッとえらいかもしれないが、人生では俺のほうが先輩だからよ。ここは先輩のことを聞いたほうがいいぜ。」

添乗員さんは下を向いてしまった。きっと怖いのだ。

結論が出てしまう前は、まだ希望がある。現実にな否定的な結論が出てしまうのはあらゆる希望が消し飛んで絶望するしかないから。

添乗員さんたちが泊まっていた国際ホテル札幌から京王プラザまでは、車で5分。信号で引っかかっても10分とかからないはずだった。Nさんは車を運転しながら私に聞いた「今何時だ？」

「7時55分です。」

「ぎりぎりだな。混んでるわ。」

道路はラッシュ状態で混雑していてうごかなかった。

下を向いていた添乗員さんは何も言わなかった。

私は座席の後ろを振り返って添乗員さんに聞いた。

「京王プラザの喫茶店で、どの喫茶店なんですか？」

「え？」

「京王プラザって何箇所かコーヒーショップがあると思ったんですけど。」

「そうなんですか？」

「まいったわね、分からないの？」

「喫茶店としか書きませんでした。」

駅前通は混むからと京王プラザ前を抜ける一方交通路に入ったがやはり混んでいた。

「どうでしょう、自分のミスです。喫茶店が何ヶ所もあるとは考えませんでした。」
結構おろおろしている。

「手分けして探せば何とかなるさ、それよりもう8時だろ？駐車場に入れてたら遅れるから・・・」
「分かった。前で降りる。」

添乗員さんは緊張で下を向いたままだった。

車を京王プラザの前につけると、私は助手席から降りて、添乗員さんを車から引き摺り下ろした。

「どうでしょう？自分は喫茶店を指定していませんし、第一いないかもしれない。」

「うるさいわよ！ここまで来たらつべこべ言わないで今出来ることすんのよ。」

「どうやって探します。」

「全部の喫茶店を、でかい声出して探すのよ。」

添乗員さんは緊張で足元が覚束なかった。不安と恐怖が全身を駆け巡っているのだろう。引き返したいそぶりの添乗員さんを引きずるようにホテルの玄関から連れ込んだ。

「きつといないんです。きつと。」

「うるさい！」

私もどうしてあんなに意地になったのか分からなかった。でも、何箇所かある喫茶店をこれから駆け巡るように探さないと、と思いながら入って右手のフロントの前を通ろうとして、あるものを見つけて私は立ち止まった。

「駄目です。」

添乗員さんは真っ直ぐ前さえ見てなかった。

「添乗員さん、あれ見て！」

ロビーの通路の曲がり角に結婚式の受付の看板のように『〇〇〇〇様貸切席 ⇒ 』の立て札があった。

一番奥のコーヒESHOPP樹林に行く通路の手前、左側の喫茶店の手前に大きな四角い行灯があって、やはりそこにも『〇〇〇〇様貸切席』とあった。

「添乗員さんの名前じゃない。」

「ええ、でも・・・」

ピアノが音楽を流す洒落たフロアーに降りていくと、そこに数人の人がいた。

「・・・」 添乗員さんは、声が出なかった。

前に進み出てきた小柄な女性が彼女なのだろう。

うーん、私は決して負けてない。負けてないが、悔しいが勝てないと悟った。

初老の男性が声をかけて来た。きっと彼女のお父さんだろう。

「〇〇さん、一つだけ確認したいことがある。」

「はい。」

「あなたはもう一度やり直したいということはどういうことだね。」

「はい、許されるならばお嬢さんを自分に下さい。」

「具体的にはどうしたいんだね。」

「結婚して家庭を作りたいです。」

「家庭とはどういうものですか？」

「彼女がいて二人の子供がいて・・・」

「子供は欲しいですか？」

「すぐに欲しいです。」

「本当かい？」

「ええ、自分は子供好きですから。」

「ちゃんとした父親になれるかい？」

「・・・自信はありませんが、頑張ります。」

「それじゃあ・・・」

彼女が、進み出た。

「ごめんなさい。」

「許してくれるかい？」

「わたしこそ。」

「自分と一緒にあって欲しいんだ。」

「その前に、あなたにどうしても言っておかなければならないことがあるの。」

うしろから、初老の女性が前にでてきた。

「？」

彼女の母親ではないかと思われる女性は、手に赤ちゃんを抱いていた。

「あなたの赤ちゃんなんです。」

「・・・」

「！」

私は声が出なかった。

なにこれ！

ということ。本人はもっとびっくりしているだろう。

結構長い沈黙があった。

そうして、添乗員さんは前にすすんだ。

「あの・・・自分の、赤ん坊ですか。」

彼女は、言った。

「・・・そうです。・・・あの、驚いたでしょう。父親になることを含めてよく考えてから、もう一度会いませんか。」

添乗員さんはすぐに答えた。

「自分にはこの子の親としての権利がありますよね。そうして果たさなければならない義務も。」

もう一度言います。この子のためにも自分と一緒にしてください。」

彼女がわっと泣きながら添乗員さんの胸に飛び込んだ。

「おい上手くいったのかい？」

気が付くとNさんが横に来ていた。

車を駐車場に入れるのに相当手間取ったらしい。

「幸せの黄色いハンカチよ。」

「そりゃあ、上出来だ。」

後で聞いた話をまとめると、彼女は子供が出来て仕事が出来なくなると、彼の負担になってしまうことを恐れて、両親に連絡をとったらしい。

驚いた両親は彼を誤解したまま彼女を連れ戻したのだが、彼女は妊娠中毒症でほとんど病院に入ったきりに近かったそうだ。

両親はこれ以上娘に悲しい思いをさせたくなくて、彼が尋ねて来たことも手紙も全て隠していたらしいが、彼女は彼女で彼のことが心配だったらしい。

自分で生んで育てる決心をするなどすごいことだと思うが、その理由が自分が足手まといになりたくないというのだから、さらにすごい。

どうしようもないヒモのような男と思っていた男が、ちゃんと職を得て、それなりに礼を尽くしてくるのを見て次第に両親も心が変わってきたらしく、添乗員さんの叔父さんが尋ねて来たのを機に彼のことを見直していた。

両親は子供が生まれてその子を見ると父親が必要だという思いは強くなり、無事就職をするという最終試験もパスし、今回の手紙を彼女に見せて会うこととなった。

当初、手紙を見せたときは彼女は半信半疑だった。

次に赤ん坊を見て、愛想をつかされたらどうしようと心配のほうに先に立ったらしい。その心配も杞憂に終わった。

喫茶店の看板や行灯は彼女の弟が京王プラザを見に来て、分からなかったら困ると言い出し、どこの喫茶店なのか聞けばいいだろうという父親に「それじゃあ最初から行きますっていつてるみたいじゃん。俺が演出してやる。」といってホテルに訳を話し交渉してこの形になったらしい。弟はロビー中に看板を立てるつもりだったらしいが、さすがにそれはやんわりと断られた。

彼女の父親から、家族全員の紹介をしてもらい、[地中海]というレストランで夕食の用意をしてあると言う事でそちらのほうへ移動した。

私達は誘われたのだが、家族水入らずの中に他人の私達が入るのは変だったので、丁重にお断りした。

私はNさんにアパートまで送ってもらうことになった。

「なあ、ひょっとしてあの添乗員さんに、ちょっとほの字だったかい？」

「ちょっとじゃないよ。」

「ふーん、うちの息子紹介してやろうか？」

「冗談じゃないわよ。Nさんがお義父さん？却下！パス！」

「ま、そのうちいいこともあるさ。」

「私はめげんよ！明日からまた頑張るさ！こんないい女を世間がほっとく訳がない！」

翌日の天気も晴天だった！バスは添乗員さんと、お客様と、お気楽運転士と、能天気なガイドを乗せて、今日も爆笑旅行を開始した。

*この話はフィクションであり話中に登場するいかなる施設・個人とも実際に存在するものではありません。また、大げさに書きやがってこの野郎、人に言わないって言ったろう！とお怒りのあなた、創作です創作！これはフィクションです。それに言ったのではなく、書いてだけです。ひとつそういう方向で・・・。

ガイドが綴る北海道 一永楽の黄色いハンカチー

<http://p.booklog.jp/book/57065>

著者：織春久遠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tadami5555/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57065>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57065>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ